《翻　　訳》

ダリエンの大惨事（4）

プレブル：＜告発、1696年＞

渡　辺　邦　博：訳

目次

ダリエンの大惨事（2）、所報第 3 集、2012 年 12 月、地域公共学総合研究所
ダリエンの大惨事（1）、桃山学院大学経済経営論集 54/3、2013 年 2 月
ダリエンの大惨事（3）、社会科学雑誌 11 巻、2015 年 3 月、奈良学園大学社会科学学会
ダリエンの大惨事（4）告発、1696 年、社会科学雑誌 22 巻、2020 年、3 月[1]

「1695 年 12 月から 1696 年 2 月、ロンドンにおける、件の重罪と不行跡の告発」

1603 年にジェイムズ 1 世とともに、腹ペコのスコットランド人たちの騒々しい行列が南にやってきて以来、小さなことをほじくる時には上流階級を猿まねするその日暮らしのソウニー[2]は、品のよくない物笑いの種であった。イングランドは、それまでに冷やかしの対象だったウェ

1 本稿は、J.Prebble, *Darien Disaster*, 1968 の pp.43~67 の翻訳である。
2 Sawney、スコットランド人のこと。*Chambers Scots Dictionary*, Edinburgh, 1974.

イルズ人たちをなぶりものにしてしまってはいたが、アイァランド人がどれほど軽蔑に値するかには未だ気が付いていなかったのであった。スコットランドは、その後200年間はイングランドの道化となる定めにあり、ジョンスン、ラム、シドニー・スミスのような機知に富む作品なり、ホガース、ロウランドスン、ギルレイなどによる挿絵とともに、このこうした冗談が活き続ける運命であった。

貧乏や偽りがお定まりの話題であり、さらに17世紀の終わりに言われていたことは、スコットランド国民には貪るものも盗むものもないのだから、そこには８つの戒め[3]しかないのだと。不器用にジョンスンを先取りした体だった大聖堂主祭ロッキアーを借りるならば、外国で顔を合わすスコットランド人は誰でも気が走っているが、国内に残る奴はそれがない。イングランド人旅行者たちが報告したことは、一番貧しいスコットランド行商人でさえ、自分をジェントルマンだと思い込み、太刀を佩い、嗅ぎタバコの香りを撒き散らすようなことがありふれたことであった。ジョン・マッキーの言うには、ホリールード館（やかた）の周りの世に言う公園は、樹木も鹿もいない〈動植物の気配がない〉確かに滑稽な代物であった。さらに、スコットランド人はうんざりするような偽善者たちだった。うるさ方の駆け出し弁護士ジョウゼフ・テイラーは、「彼らはタチが悪いから、教会の中でどんなに殊勝なふりをしたところで、それ以外の人たちと同じように罰あたりで、タチが悪いに違いない」と書いていた。説教壇をドンドン叩く彼らの牧師は、聖職者というよりも太鼓叩きの方が相応しい。彼らは悔い改め台から小言を漏らし、夥しい数の売春婦たちの出しゃばりに烙印を押すけれども、エディンバラのハイストリートに居並ぶに時の彼らの洗濯女たちと言えば、恥じらいや慎み深さもなく、剥き出しの腹にペチコートを羽織り、水とウシのフンが混じりあったところに、身につけたものをさらして、闊歩していたのである。〈p.42〉テイラーの言うことには、スコットランドのシラミはどこにで

3『旧約聖書』、出エジプト記20章3節から17節、申命記第5章7節から21節、「他人の財産を貪るな、殺すなかれ」、十戒から除くと八戒か？

も現れ、ベッドに入るとなれば、必ず手袋や靴下を纏うのであった。そこに威厳ある家屋が並んではいても、ロイヤルマイルの有り様は、哀れなものであった。「朝ともなれば、臭気が鼻を付くようになるので、われわれが通りを過ぎる場合には鼻をつまみ、両方の靴が使えないのを恐れて何処を歩けばよいのかに気を取られ、頭に降りかかる災難をおそれて夜中には真ん中を歩くしかなかった。」

スコットランド会社の理事たち(ディレクターズ)が上院の法廷に召喚されるに至って、スコット(ソウ)ランド(ニ)人(ー)が再びシッポを掴まれるに至るはめとなった。ロンドンのお楽しみは、2ページにわたり、インクをたっぷり染み込ませたビラによって景気づけられ、チャリング・クロスにあったコーヒーハウス海軍省では3ペンスで売られていた。人呼んで「洞窟に入れ(Caveto Cavetote)」、それには国内の一人の友人への手紙と言うお定まりの形をとり、「防水帽(Tarpallian in Querpo)という差しさわりのない署名」が施されていた。皮肉なことに、それは、とりわけその問題はスコットランド人に対して設定された情報の結果だと言う、当時流布していた噂に関わりがあった。その情報提供者はイングランド人ではありえなかった。

ある考えによると、イスカリオテのユダの一族であるスコットランド生まれの人物のなにがしかが、持って生まれた陽気な気質から、愛すべき謙虚さを持って、スコットランド会社を経験しようと考え、カーテンの背後にいる情報提供者の栄誉ある仕事を引き受けようと頭を下げたが、そのことが原因でそのお披露目者が、国王や議会に勝るとも劣らない〈変わるところのない〉裁判所に訴えたのであった。

また、ある人の言うには、その会社に対する不満は、「別の目的に利用するための、口先からだけ」のものであって、政府や王権を脅かす策略に過ぎない。また別に次のような意見もあった。その会社は、

いく人も父親のある雑種犬であって、そのうちの1人が東インド会社におり、東インド会社内でも理事を務めるスコットランド会社の株主もいて、逆の場合は逆の状態でもあったであった。

また、私たちには、このような会社、つまりつまらないインドの商品のなにがしかに頭を悩ますよりも大切なことがある。その品物を商う商人たちは、大抵の場合、私たちの姪や娘たちを町をうろつく洒落男たちに誘う囮のアヒルに他ならず、彼らは富くじの手口に精通しているので、空威張りの末、スッカラカンでお終いとなるのが関の山で、私たちが財産を手に入れるのに勤しんでいる間は、女房たちもまた、財産の相続のためインド人の赤ん坊を手に入れるべくインド風の雨傘の下に集まるのだ、と言う者もある。

〈p.43〉

しかし、貿易関係者たちの間では、笑いどころではなかった。適正な商業投機の限界を超えて引き伸ばされた戦争は、平時に比べると利益の少ないものとなった。より多くの騎兵、歩兵、兵器を国王が求めても、ハイドパークではムダ使いする戦闘を扱う大がかりな芝居が再演され、国王の軍事行動がこれ以上になる幕開けとなる断食や祈祷の日々が続き、国王の連隊がこれまで以上の栄光を勝ち取ったとしても、その商人たちはそれ以上の船舶を確実に喪失することが明らかとなった途端、なんら引き立てではなくなった。上院には、東インド会社、ハンブルグ会社、王立アフリカ会社とレヴァント会社、さらにジャマイカ、ペンシルヴァニアとニューイングランド、バルバドスとリーワード諸島との商業貿易協会からの、請願が提出された。ひとつひとつが、勝利を求める下品な賛歌に異を唱える憐れな葬送歌であった。

1年間に、主だった9つの会社が、フランスの軍艦と私拿捕船と対戦して、嵐やハリケーン、難破などによって、103隻の船舶を失った。船

舶と積荷の損失総額は 226 万 2550 ポンドに上り、そのうち 150 万は東インド会社だけの負担となった。フランスは、すべてがシリー諸島とアイァランド間におり、ベンガルとスラートから満載状態で本国に向かっていた大型船舶 6 艘を手にした。バルバドス商人は、1694 年 9 月から 1695 年 9 月の間に 40 艘の小船を失い、その 4 分の 3 がフランスの私拿捕船の手に落ち、ほとんど破産状態となった。それ以外の会社の損失総額はそれ相応に厳しいものであった。彼らの請願書には、すでに失われた、華麗な船舶、つまり繁栄（プロスペリティ）、*冒険と摂理*、…サラ、*ジョンとジョアン*、…*白鳥*、*ペリカンと不死鳥*……*アンテロープ*、*狼と忠実な軍馬*…などなどの名前、積荷、乗組員と装備が記載されていた。

彼ら〈9 つの主だった会社〉が、巡洋艦に自分たちの商人たちの保護を要請し、自分たちではその砦も工作場（ファクトリ）も守ることができなかったとも述べたけれども、彼らのおもだった苦情はスコットランド人に対するものであった。王立アフリカ会社は言う、「われわれにとってこのスコットランド法は、一旦植民地が建設されるとなれば、われわれの商業はすっかり失われることになるから、一国の利益からみれば、われわれにとって有害極まるのである。」東インド会社の言い分は、イングランドの商人や船乗りたちが、「その家族や財産をスコットランド王国に移転すると、そのことによって、この国の商業を支えるストックや人手のかなりの部分を失なうことになる」、と言うものである。

〈P.44〉ハンブルグ会社の言い分は、すべてのイングランド人と、イングランドに居住するすべてのものたちが、スコットランド人との関係から締め出されざるをえなくなる。別のいくつかの会社は、こうなると、東インド会社の権限を抑制して、その独占権のいくばくかを獲得する機会となるとみた。ジャマイカ商人の意見では、ひと癖のあるスコットランド人を止める最良の方法は、あらゆる者にとって交易を緩和することだ、と。さらにリーワード商人は、実例を使って小さな例え話をした。

彼らが思い浮かべることの一つは、最近インドで、チキン一羽を半ペニーで購入したが、それを譲ってくれたヒンドゥー教徒に告げたことは、彼はその人の宗旨に対して感謝している。なぜなら、それが鳥を食するのを禁じていることが、その買い入れを安くしているのだから、と。「それは間違いですよ。旦那！と彼は言う。もしも私たちがチキンを食べるとなれば、誰もがそれを繁殖させるから、それはもっと安くなりますよ」、と。

12月9日の月曜日には、証拠提出のために召喚された国会裁判所のその他の者たちと共に、スコットランド法で指名された7名の理事が、上院法廷に現れた。その日は、ジメジメした上に、川からの霧で冷え冷えしており、議会は点灯時間を超えて開会された。金曜日の直近の会議以来、理事たちは動揺で動けなくなっており、週末を超えても、その会社に対するイングランドの200名もの出資者たちの多くが、慌てふためいてその名を取り下げていた。ただロバート・ブラックウッドだけが、この先起こるかも知れない危険に備えて虎視眈々の状態であった。彼はマッケンジーから帳簿を回収して、従者を使ってそれをスコットランドに送った。

2つの重要な問題が、理事たちに投げかけられた。なぜ理事たちは、イングランドに損害を与えるかに思われる会社に関わるのか？さらには、その会社の出資者たちとは何人（なにびと）たちだったのか？彼らが口を揃えて、また無邪気にも驚きながら答えたのは、彼らには悪気があったと考えるのは疑問だということであった。彼ら理事連中は、出資者たちのみならず、スコットランドにも関わることも考えずに、帳簿は閉じられたのである、と。その所在については、彼らの預かり知るところではなかった。彼らは、彼らがこの法律をスコットランド議会で請願したのか、あるいはその請願を求めたのか、と尋ねられた。はたして、ジェイムズ・チーズリの答えが、すべてのことに対するお手本であった。「わたくしは、

直接にせよ間接にせよ申し込みをなされたのがイングランドの何方かであるのかはいっさい知らない。〈P.45〉スコットランドの方々は私たちをご存知で、それが応募の理由であったのです。パタースンの依頼に対して、大商人が続々とそれに応募したのです。私の知る限りでは、スコットランドは、5、6 年も前からそのような法律の計画をもっていたのです」、と。

それでは、パタースンは何処にいたか？上院は、その午後遅くに彼を召喚し、守衛官たちがウエストミンスタ・ホール回廊から、陛下の歩兵たちの頭越しに、さらにそれを上回る歩兵や御者たちの控える中庭に向けて、大音声で彼の名を叫んだけれども、なしのつぶてであった。終日彼が姿をあらわすことはなく、彼の出処進退については音信不通状態であった。彼の友人で同僚でもあったジェイムズ・スミスは、その男の住まいを尋ねられたけれども、その答えは、ソーホーに近くのデンマーク・ストリートということであった。怒り心頭の上院は、直ちにパタースンを召喚すべく伝令を送った。

日暮れを過ぎ、議会にパタースンが戻ったので、呼び入れられ、宣誓を済ませたとの報告があった。同じ質問を受けた時、彼は、ケンカ腰の苦々しげな調子で、労多くして割りに合わないことを思い起こしながら、ふてぶてしく返答した。「私は外国貿易に精通していた。私はある会社のため海外にとお願いをした。1691 年に私はイングランドに戻り、イングランド銀行の提案を行った。にもかかわらず謝礼はなかった。5 月あるスコットランド紳士から、スコットランド法に関する私見を示せば、必ず報われるとの要請を受けた。私の意見に従いその法令は作定された。その経過については、何も知らない。」

出資者名簿について？それはスコットランドにあると、彼は信じていた。さらに、その会社の後援者たちに対する報酬として保証された分け前は？「私に保証された分以外は、私は何も知らない。」と、彼は突き

放したが、それ以上の参会に止まることには隼かでないと述べた。

山積み状態の書類、証拠物件、その貿易会社の黒や朱色の印章で嵩高くなった誓願書類を目前にした理事たちや目撃者証人たちを上院議員たちの面々が冷ややかに眺めるうちに、その審査はその週一杯続いた。ブラックウッド氏は出資者名簿を手に入れたか？イヤ、未だだ。彼が最後にそれを目にしたのは何時のことか？「先週の金曜日であった。それから私は、それを送付すべく、私の従者に渡したのだ。彼が出かけたのが火曜日だったのか、水曜日だったのかは私は不知である。今それが何処にあるのかは知らない。しかし、私の従者はスコットランドに赴いてここにはいない。」マッケンジーが同じ質問を受けたが、名簿はロンドンを後にしているが、それが何時のことで、何処にあるかは明言できないのを認めた。追い込まれた彼が認めたのは、彼が出資者名の一覧を所持していたのは確かだということだった。さらに、バルフォアは、彼が召喚を受けた時に、上院に対して出資帳の前文の写しを提供したのであった。

〈P.46〉理事たちで終わりとなった時、上院議員たちは、このスコットランド法が、イングラントの貿易、収入、ならびに航海に対して甚大な影響を持つのは疑いないと宣言する、関税委員会（Commissionors of Customs）が作成した書類が読み上げられるのを耳にした。もしもその取り消しができないのであれば、同種の奨励（encouragement）が、イングランドの商人たちにも付加されなければならない。いずれにせよ、スコットランド会社と連携を続ける、イングランド人や、イングランドに居住する人たちに、厳しい罰則が課されなければならない。

それは土曜日のことであった。上院は、大方の観測よりも長く、この審査に6日間を費やした。彼らは、国王に向けた陳述を作成するための委員会を指名し、そのお披露目に際する下院の参加を促して、（目下のところ、軍事予算を斟酌し、ウィリアム国王の次の戦役には270万ポン

ドを可決するとして）それを下院へと申し送った。この仕事すべてには、他の事柄を棚上げにしていた。スコットランド会社の代表者たちとその敵対者たちとが激しく巻き込まれる、そう遠くない未来からの一縷の光は、一件の撤回動議であった。「**動議**：イングランドとスコットランドとの合邦を行うべく提案されるすべてのことを受け入れるために 1 日を指定する」。だが、それについては、何も生まれなかった。上院は、当面の間スコットランドを彼らの堤防としたのだった。

この瞬間に至るまで、下院はスコットランド会社のことを公式には何ら留意して来なかったが、その追求に加わる用意はできていた。彼らは、その構成員の中から検事総長（Attorney-General）と検事次長（ソリシタ ゼネラル）の指導により 28 名を選出し、絵画（ペインテッド）の間（チェインバー）において上院委員会での顔合わせをして、陳述の期日の合意を見た。早めに周知し、予め審議するため、土曜日の夜の下院までに陳述は書き上げられた状態となるように、早急に処理された。それは二度読み上げられ、満場一致の承認を得た。それは、スコットランド法の通過とスコットランドに与えられる貿易上の便益についての、簡潔かつ正確な説明を示したものであった。「ひとたび、その国がアメリカに植民地を建設するとなれば、タバコ、砂糖、原綿（コットンウール）、皮革、帆柱などなどの領域でのわれわれの商業は完全に失われる……この王国は間違いなくそのような商品すべての貯蔵庫となるから、イングランドの植民地やそこからの取引は消え失せ、われわれ自身の製造業品輸出も年々少なくなる」。〈p.47〉そこでは、その法によりウィリアム〈王〉は、スコットランド会社に対していかなる損害があろうとも、その賠償と弁済を確保し、イングランドの多大な損失にしかなりえないが、この植民地防衛にはイングランドの戦艦を使用して公的費用を注ぎ込まなければならないと、注記されたのであった。その言葉使いは、上院に提出される請願の言い回しを折に触れて引き写したものであるが、救済策さえ示唆されなかったけれども、決して暗黙の了解ではなかった。その法律が廃案され、その会社がつぶ

されるべきであった。

その年のその時間にすれば晴れの状態であった、12 月 17 日午後 3 時から 4 時の間に、ウェストミンスター・ホールの外には馬車や、発砲する歩兵と、毒突く馭者からなる群衆が大集結して、バース・ロードをへてケンジントンに向かう両院の議員たちを大挙待ち構えていた。下院は９時から開会状態であった。彼らは、イングランドとスコットランドとの国境での窃盗や略奪を防ぐため、１法案の認可に着手し、東インド会社の重役や社員たちから出された請願をめぐる論争の最終局面に遭遇したのである。これにより、その会社は 25 万ポンド以上の価値があるイングランドの製造品をすべて積載して海外に向かう 19 隻の船舶を保有していたが、その商業上の収益が、「近隣諸国の株式会社に付与された大きな特権のために」喪失する危機に曝されていることが、伝えられた。さらに、順風を待って、ダウンズ[4]ではさらに 4 隻の交易船が停泊し、他方では 4 艘がロンドン・ブリッジから下流に向けて準備を整えており、1 年以内にスラートやベンガルを発って帰国の途につくべく積載を遂行している 15 隻がいた。このすべてが危機状態にあった。その会社は、「議会が適切とみなし、株式組織を所持することが許され、国家の名誉と便益のために営業を遂行することができる、特権と免除を所持する会社を設立するために法令を提出する許可が与えられること」を要請した。しかるべき感触があって、下院はスコットランド法を調査する委員会を指名し、委員会は、それに関係する書類と人材をすべて取り寄せて、検討する権限を持った。さらに、関係する人材は、上院内の法廷で厄介な 1 週間をつい最近費やしたばかりの、スコットランドとイングランドの紳士たちであった。

それから下院議員たちは、議会全体から委員を選出して、議事堂を離

4 イングランド南部の、海峡停泊地。

れ、中庭の喧騒で自らの乗物を見つけるべく、威厳のない争いを経て自分たちの同僚に合流した。〈P.48〉

騎手、馬車、先駆けからなる長い行列が続き、一目散の歩兵と騒つく騎兵がペティ・フランスから霜で凍てついたピムリコの原を通って進み、ハイドパークからケンジントン・ロードへと、歓呼の声を上げた群衆が集まった。国王との会見は長いものではなかった。宮殿の聴聞（オーディアンス）の間（チェインバー）は、風通しが悪い、息苦しい状態で、絹と金襴、巻き毛鬘と白粉、銀製のバックル〈留め金〉と深紅のヒール、身体の汗とポンパドールがごた混ぜ状態であった。上院議員と下院議員たちは、その部屋の端っこに、憂鬱な面持ちと大きな鷲鼻、黒の上着にガーターの勲章、片方の手には喪章を付けた、孤独な人影を見届けようと首を伸ばしていた。ウィリアムは、耳障りで、喘息がかった咳を交えながら、演説が読み上げられるのに行儀よく耳を傾けていたが、それが終わると、頭を下げた語り手に会釈して、「朕は、スコットランドのために尽力をしてこなかったが、この法令から生ずるであろう不都合を防止すべく、何らかの救済策が見つかるのを望む」と述べた。彼は起立して、退席した。

両院は了承した。彼らは、この無口で悲嘆にくれた人物から何ら強い感情を期待してはおらず、彼の発言がないことの裏に怒りを感じとった。彼は何の約束もせず、およそ口にしたことといえば、スコットランド議会の感情を深く害しないほどの含みがあったが、スコットランド議会と北方の王国についての彼の苛立ちは、やはり単純なものではなかった。その法令に対して国王のお墨付（アセント）きを得て、トゥイードデイルは、国王の委任によって彼に付与された権限を凌駕し、権利権限という不遜な前提によって、彼〈国王〉の臣民たちが、図々しくて、出しゃばりだと言うことを否定した。彼はさらに、国王がスコットランドに尽力してこなかったことを口にした時には、それ以上のことを想起していたであろう。5ヶ月前国王は、ナミュールを目前にした国王の軍隊において、グレンコウ

の虐殺に関する調査委員会の報告と当該の問題に関するスコットランド議会からの奉答を受け取った。その報告は当然のことながら、国王を罪がないとしてはいるが、それは、彼の寵児だった国務大臣(Secretary of State)ステア家の家長を非難していた。憤慨の気味があったその報告は、彼〈ステア〉が罰を受けるべきであり、虐殺を実行したアーガイル連隊の士官と兵士たちを裁判のため国王が母国に送るべきことをさらにほのめかして、「この不幸な所業の本来の原因」であるステアを告発もしている。おまけに、〈p.49〉スコットランドやイングランドで暴行を働いた多くの人たちは、ジャコバイトの侵入があったので、国王こそがマクドナルド一族の殺害に実際第一の責任を負うのだと、信ずるように唆されていた。国王は、ステアから送られた元になった命令書に署名したり、宛名書きはしなかったのか、と。

5か月にわたり、ウィリアムは、報告も奉答も認めることなく、ステアの辞任を未練がましく承諾する以上になにも行動をしなかった。しかし、2週間前、この同じ部屋で、国王は、当時ロンドンに居合わせた、スコットランドの枢密院関係者を全員招集した。彼は、その虐殺の後18ヶ月も、事件について何も知らなかったと述べて、彼らを驚かせた。この恥ずべき、そしておそらくは信用にならない告白があったので、ウィリアムの怒りに背き、人を馬鹿にしたようなうつろな面々たちが生まれ、およそ国王の名誉や評判が清廉潔白だとすることができなかった大臣たちに対する国王の苛立ちとなった。そうだ今や、ここに、耐え難い無力感が存在することになり、イングランド議会の両院が、王権にうるさく口出しすることになったのであった。

国王は、たとえそれが可能であったとしても、新兵や糧食の点で大いにスコットラン議会に依存していたので、それと敵対的なことができず、その法令の撤回などといった約束は一切しなかった。だが、明らかに自ら苛立ちがあって、イングランドが雨後の筍のようなロンドンの会社を

叩き潰すことができた。3日後、国会全体から構成された委員会として開会中の上院は、すべてのイングランド人とイングランドのすべての交易業者がその会社へ参加するのを禁じることになる法令を承認した。合意の内容は、イングラントとアイァランドのすべての船員と船大工は、その会社の船舶で業務につき、建造や修繕にあたることを厳罰をもって禁止される、ということであった。また、合意によると、「議会の法令によってイングランドに、スコットランドで最近通過した法令から生ずるであろう不都合を取り除くことができる、権限、特典、特権を有する、東インド貿易を設定すること」になった。もちろん、スコットランドの若きビヒモス[5]が叩き潰され、東インド会社が一層大きなリヴァイアサンに成長するのを潔しとしない、ヨリ小規模な貿易会社から、直ちに抗議があった。上院はその論争に飽きて、法令のことを忘れ、別の諸問題に移った。

しかし、下院は忘れたのではなかった。クリスマスが終わり、1月の3分の2が過ぎると、スパイス販売改革問題、ワイ川沿いでの不法堰の建設、鋳貨の削り取りを回復するという果てしない要請などをめぐる論争を棚上げにして、言われるところのスコットランド東インド会社の件につき、国務大臣といく人かの理事たちに尋問を行ってきた委員会の議長グランヴィル大佐からの報告に下院が耳を傾けることとなった。〈P.50〉

若きマッケンジーが最初に現れたが、彼がそれまで下院で振る舞ったのに違うことはなく、無頓着、慇懃で、そして基本的には役に立つものではなかった。彼はその会社の説明について何も知らず、取るに足りないささいなことを繰りかえすだけだった。その会社への納付金が 150 ポンドにのぼることは聞いた、それもただ耳にしただけだったが、彼は、その法令の通過については何も知らなかった。出資者名簿の在り処は？

5『旧約聖書』ヨブ記 40.15-24 に登場する巨獣。

彼が知るよしもない。理事たち全員がその人物がそれを所持するべきことを承知したのだから、彼はそれを12月6日にブラックウッド氏に手渡したのである。それがスコットランドに持ち込まれたのは確かだが、ここには、出資者の一覧があっただけだった。宣誓にも言う。「公務(de)を忠実(fidelity)に遂行(administrations)する」、ここにはその写しもあった。

パタースンは再度経緯を述べた。彼はチーズリ氏から交渉があり、その後チーズリ氏にスコットランドにおける会社計画を渡した。彼はかなりの特権を授与されていたが、「それは、私の気前よさだけから、その後すでに手放してしまった。」彼はその法令を申請した訳ではなく、その経緯も知るところではなかった。彼は、その会社の出資者が200名に上り、提案された資本が30万ポンド・スターリングだったことも承知していた。その上、400トン船が一艘装備され、もぐり業者(インターローバー)としてインド諸島に送られる提案もあったが、船舶がどこで許可され、その積荷がどこに売られるのかについては彼は知らなかった。彼は、この宣誓につき念入りに調査され、ここで質問に答えることができないと思うのかどうか、尋問を受けた。彼自身が疑いを晴らすことができたかも知れないある特殊な理由によって、彼は、「私は、本委員会に何ら隠し立てしなければばらないことはありません」と述べた。それから、ロンドンにとどまり、本委員会に答弁が残っているとの警告付きで、彼は退出を命じられた。

イングランド人理事たちと、召還された出資者たちは、恐れをあらわにした率直さで、すべての質問に答えた。ロバート・ランカシャは、当人が、東インド会社の一員であると同時に、スコットランド〈会社〉の理事でもあると述べた。彼は後者に3000ポンド出資した、というのも彼が出資しない場合は、それ以外の多数が出資を申し出ると言われたからであった。彼がいつも考えていたのは、パタースンに付与される特権が法外なものだということであった。グロウヴァーと呼ばれる出資者は、「自分は、イングラ

ンド人が外国人以上にそこから利益を手にする方がよい、と考えた」ので、その会社を支援したのだと、正直に語った。〈p.51〉さらに別のベイツマンは、自分が 2,000 ポンド出資したのは認めたが、「議会が審査の必要を認めたと聞いた」時、忠実にその会社からひきあげた、と。

3 人ともこぞって召喚の使者が派遣されたけれども、この委員会は、ベルヘイヴン、ブラックウッド、バルフォアを尋問することはできなかった。いったん不安の兆候が議会に起こると、屈強な上院議員がスコットランドに向かい、商人たちが速やかにそれに従った。

グランヴィルが委員会の報告の朗読を終えた時、下院は、東インド会社からのもう 1 つの長ったらしく、情けない請願に耳を傾けることに合意した。宮廷の外では従者たちが火鉢の周りに集まり、その指に息を吹きかけているところだったが、日暮れが近かったので、ロウソクが求められた。他方で果てしない朗読と、不用意な陰謀とか反逆罪、さらには王国の交易と繁栄に対する脅威などに対する多数の証拠が提出されると、一同は、カンカンに怒った。弾劾や投票を求める叫び声があった。決議文が起草され、提出され、是認された。

本王国において「公務に忠実」との宣誓にかけて、アフリカとインド諸島に向けの貿易を管理し営業を行うスコットランド会社の理事たちは、重罪と不行跡に相当する、と決議する。

スコットランド議会法の名をかたり、会社の形を取り、かく行動し、上述の会社を営業するため、本王国内で貨幣を調達する、アフリカ、インド諸島向けの貿易を行うスコットランド会社の理事たちは、重罪と不行跡の罪に問われる、と決議する。

さらにこれに続いて、22 の決議があり、会社の理事 1 名それぞれを名指して、その当人が「いわゆる重罪と不行跡のかどで弾劾される」と

宣言している。最終の1動議によって、委員会は、弾劾に備え、その目的のため、翌日、議長室（スピーカーズ・チェインバー）で午後4時に会合を持つ任務があると、決議した。

しかし、そこからは何も生まれなかった。弾劾の各項は、起草されたとしても、決して提出されることはなかった。逆ピラミッド型〈上から下への〉の手続きは、人証であるロウデック・マッケンジーにかかっていたが、彼は、〈P.52〉弾劾のかどで委員会から召還されても、それに応じなかったのだから。守衛官の伝えるところでは、彼の滞在所はもぬけの殻だったし、2月8日に彼の逮捕の布告が発せられたが、彼が見つかることはなかった。彼のその後の人生を通じて、イングランドからの厳しい憎しみを背負うことにはなかったが、数週間後に彼はエディンバラにいたのであった。

理事たちの弾劾が失敗に終わったとは言え、全く変わりはなかった。イングランドとスコットランドとの資本による共同事業の望みは今やない。出資者たちは、クリスマス以前に、その名を抹消したし、彼らが上院と下院に姿を現してから、イングランドの理事たちは、自分たち自身の国の貿易会社と、出来る限り平和を保ってきた。しかし、悪疫を発生させるスコットランドの会社がエディンバラに再び出現して、イングランドの繁栄と財産を脅かすのではという懸念は存続していた。

エドワード・ランドルフはそう考えていた。彼は植民地検査官ではあったが、最近そこから戻って以来、敬意をもって聴聞を受けた。3月に彼は、上院に対し、用心しなければ、スコットランド人たちがアメリカに植民地を建設してイングランドは大損害となることを報告した。彼が示唆したのは、フランス領カナダからカリブ海に至る植民地地主と植民者たちすべては、「北緯32度から44度に至る目下のところ国王陛下の領土でありイングランドの統治につけ加えられている全領域」に相当する援助を、スコットランドに与えるのは、大逆罪にあたると言われている、と。

ランドルフ氏は、スコットランドには何ら好意をもたなかった。スコットランドの商人たちは、航海条例をすり抜けるか、けしからぬことだがイングランド人を装い条例を回避するもぐり商人であった。「彼らはわが国の植民地との貿易の旨味を長らく味わったし、また、植民地に持ち込んだ商品にも、そこからスコットランドに運んだタバコに対しても、国王陛下には一切税を納めていない。」さらに彼が上院に対して念を押したのは、役人たちが議員たち（レジスレイターズ）にその業務を教授する際の自己満足なやり口について、関税委員（コミッショナーズ）は、下院による弾劾請求に先立つ数週間も前に、この問題に気付いていた、ということであった。アメリカにおける国王の植民地のすべてに属する総督、ニューヨークとジャージー、マサチューセッツ、ペンシルバニア、メアリランドとカロライナ、ジャマイカ、ネヴィス、バーミュダ、およびカリブ海のその他の島々に、書状が送られた。それぞれに、スコットランド法の諸条項が送付されたが、それぞれは、〈p.53〉「この法令から生ずるかもしれない不都合と損害を防ぐのに十分と思われる」、植民地の安全に対する現行法の下でのその義務について念を押すものであった。しかし、ほとんど多くの独りよがりな公僕たちと同様に、ランドルフ氏は彼の明晰なる精神が持つ予知力を過大評価していたのである。

その春、国王はイングランド議会に犠牲となる生贄を示した。彼は国王のスコットランド〈担当〉委員を解任したのである。トゥイードデイルは、瀕死の床にあったから、この老人は、これを、感謝されない任務からの寛大な放免であると見なしたかもしれない。ウィリアムはまた、ただ１人のスコットランド担当国務大臣、ジェイムズ・ジョンストンの職も解いた。これには若干の予想外の結末があった。数ヶ月前まで、ジョンストンは、ステアと同じ執務室を使っていた。しかしながら、それを自分だけのためを望み、グレンコウの事件に関し、うまく立ち回って、かの家長（マスター）を引きずり下ろしたのだった。

かつては偉大で、高貴な事業において一度は手を組んだ人たちとは手を切って、ウィリアム・パタースンはスコットランドの故郷に戻った。

〈P.54〉第２章　たち昇る太陽

「彼らは、群れをなして、この王国のいたるところからやってきた」
エディンバラ、1696年1月から7月

彼が１人で旅することはなかった。もちろん彼には妻があり、おそらくひとり二人の子供もあったが、定かではない。下男に下女を一人づつ、そして、彼には友人の積りだった二人のロンドン市民、ひとりは革命家を自称し、もう一人は、ごくつぶしだった。パタースンは、自分には向かう人間たちの悪巧みや私欲を見抜くことはできたが、残念ながらお追従には目が効かなかった。悪党仲間に対する鋭い眼力のあるウォルター･ヘリスは、両タイプの人間たちから教訓を得ておればと断言した。

彼は数名の相談役、ないしは看護人たちを引き連れていたが、実のところ、この者たちは、パタースンの荒削りで整理されてない考えを形にする場所を提供する一組のずる賢い若者たちであった。この者たちの一人は、生まれつきの名前がウォールン、現地名でル・セリュリェ、そして英語名がジェイムズ・スミスと言った。彼はほとんどのヨーロッパ語に精通し、特に英語が堪能だった。彼は、所持する賢者の石によって、オランダ人たちにいく度となく策略を仕掛けた名高いイタリア貴族の秘書として以前は振舞ったが、この時期は、著名なロンドンの大商人で通した。もう一人の名前は、スコットランドのリースに住むヨークシャ出身の両親から生まれ、故あってオランダで商人として育てられたが、零落して窮余の策としてイ

ングランドに転じたダニエル・ロッジであった。この男は、愉快で軽薄な男で、この悲喜劇に際してその役割を見事に演じた。

全部が嘘であったはずもなかった。ヘリスは両名の知り合いだったし、事実二人とは旧知の仲だったと言う別の人たちの手紙があったのだから。〈p.55〉立派な風刺画には、それと見分けられる特徴、つまり鼻先、眼つき、内面に相応しい飾らぬ目印となる出たちなどが、なくてはならない。スミスは、ロンドンのスコットランド人から受け入れられた最初の部外理事として、9 月 26 日の第 2 回目の会合でその地位を獲得した。これはおそらく、パタースンの推挙によるのであって、オランダとハンブルグでの実りなき歳月にあって助力と親交があったことへの返礼でもあり、スミスがソーホー近くのデンマーク・ストリートにおいて下院向けの演説を慌ただしく行った後でも、彼〈パタースン〉はこの人物への信頼を継続していた。スミスがスコットランドに赴いて失うものは全然なかったし、この場合、ある人物の後ろ裾（コート・テイル）は、もう一人の一時の紋章としても役立つものであり、パタースンの戸棚（クローゼット）もそうであった。エディンバラは、彼とロッジとを、パタースンと一緒に来たと言うことから受け入れ、その週のうちに、3 名全員が、会費の支払いもなく、その市の議員とギルド仲間とになった。パタースンは、感情で燃えたぎる眼で目撃した生涯以上に大きく、自分が国民の最愛の人、イングランドによる裏切りの犠牲者、未来の繁栄の設計者であることを、悟った。人々は、キャノンゲイトでは彼に微笑を投げかけ、彼の名前を呼び、ロンドンでの辛酸の後、流行歌作者による褒め言葉で、彼の素朴な虚栄心を喜ばせたのであった。

さあ来い、元気を出せ、そして眼を覚ませ！
いにしえのソロモンの知恵を思え

そして、われわれのパタースンと心から一緒にやろうではないか
インドの財宝を持ち帰るために

しかしながら、華やかな家屋のどちらかと言えば冷めた空気の中で、その都市の商人たちは、このソロモンがその知恵に対して要求した、高額の報酬を忘れなかった。彼らは、彼の助言、カリブ貿易に関する知識、スコットランドにおける彼の風貌がもたらす天来の着想を必要とはしたが、実態以上に彼に信用を与える評判は気に入らなかった。ロンドンにいる彼らの友人たちからの書簡は、この見方を増幅した。「私は、パタースンが喋りすぎる、と思う」と、デイヴィド・ネアンは書いた。「そして、人々の期待は、彼のせいで度が過ぎるほど大きくなっている。この地で関心を持つ人たちは、この問題についての彼の処理能力に必ずしも頼りにしてない。」

だが、スコットランドは英雄や救済者を必要としていた、と言うのも、時勢は厳しかったから。ロウランドの畑は、相次いで2年目の不作のおそれがあり、疫病や飢饉は避けられないと思われた。「われわれは陛下に、常備軍の投票を行った」、とサルトーンのフレッチャーは思い起こさせ、〈p.56〉「貧困のため飢餓状態にあった何千ものわが国民が路上にある落とし穴によって死亡するという悲しむべき見通しが伝えられるのに、それを上回る多数の人が餌食となった伝染病が広がるのを放置して、パンを贖うお金をそれ以上に節約する必要に迫られたが、その帰結がどうなるか、神のみぞ知るである。」やさしくイラクサで触れることで、国王は、ご自分がスコットランドに尽力してこなかったと慎重な苦言を呈されたが、それは早まった自尊心を育成することになった。スコットランド議会はイングランドのそれより大きな権力を持つと申されたが、それが笏の一打ちに与えたものを、国王は拒むことができなかった。「スコットランドは」、とサルトーンは尋ねた。「王冠連合（ユニオン　オブ　クラウンズ）が押し付けられ、イング

ランドの内紛によって、専制政治が続けられて来たが、両国の合邦も認めず、スコットランドに、人間としてキリスト教徒としての、われわれ自身の特権を委ねようとしないのはいったい誰なのか」。スコットランドは、英雄や救済者を必要としていた。彼は〈ウィリアム〉ウォレスではなかったけれども、つかの間にせよ、ウィリアム・パタースンこそが他でもないその人と思われることになったのである。

エディンバラの発起人たちは、ロンドンにおける彼らの会社のみじめな失敗によって、おそらく救われたであろう。彼らは、共同事業にそもそもあまり熱意がなく、ベルヘイヴンが彼の 2 名の仲間とともにさっさと引き上げたのは、下院を怖れたからではまったくなかった。故郷こそが第一で、ロンドン商人の圧倒的優位から離れた今、スコットランドは、自分たち自身の会社を立ち上げ、スコットランドの資金を募り、スコットランドの乗組員とその荷によってスコットランド船を準備し、スコットランドの法律が許す地球上のどこであれ、みごとなスコットランドの皮靴で闊歩できるのだ。国王の偉大な僕（しもべ）たちは、今や一旦は喜んで受け入れた事業からオコジョ（アーミン・スカート）の町を取り戻した、トゥィードデイルは、（国王が彼を解任しなかったらの話だが）、友人たちに対して、彼の同国人たちがこの熱狂のために燃え尽きるのを止めるのが彼の義務だと考えると述べたかも知れない。しかしながら、バルフォア、ブラックウッドやそれ以外の者たちは、できるだけ速やかに出資簿を開くことを決めた。彼らは、ロンドン商人たちから彼らに要求された 30 万ポンドで一度は不安になったのだが、いまや、40 万ポンドという、おそらくスコットランドに流通する額の半分に相当する驚くべき金額を要求した[6]。その増価額は、おそらくイングランド人の引き上げによって必要になったが、それは大胆な挑戦であるかのように説明された。

6「合邦以前にスコットランドで流通していた金銀貨の全価値は、イギリス正貨で 100 万ポンド以下だったとは考えられない」アダム・スミス『国富論』水田洋監訳・杉山忠平訳、岩波文庫（二）51 ページ。

出資名簿は、ハイストリート北側の交差点脇にあったパーディ夫人のコーヒー・ハウスで、2月26日に開かれた。〈p.57〉個人または団体による出資可能な最低金額は、100ポンド・スターリングであったが、本当にそれを請け合うことができた者はなかったので、帳簿が閉じられる前に、変更されることもあっただろう。巨大で差し迫った感情のうねりが存在した、それは、60年前の国民契約（National Covenant）以来未知のまとまりであった。出資者たちのほとんどは、パタースンが持ちこむと想像されたあのインド会社の分け前に対する利益に目がなかったが、熱狂的な愛国主義の影響を受けない者は誰ひとりとしてなく、一つにまとまるという目的からくる興奮の影響がなかった者もなかった。その国の政治、宗教、社会構造が独自であることが、ハイランド外では、それを可能としたのだった。プレスビテリアンの原理が、あらゆる階層の人々は、公式の祈祷に際しては、平等でなくてはならないという考えを確立していた。彼らの権利を防衛するにあたっては、スコットランド人は必ず互いに助け合うという、「一団（エインバンド）」の伝統が古いそれとするなら、ローリー・マッケンジの出資名簿をそうした一つの絆と見なすのは訳もないことだったと。それに対する反応が、テイ川からトゥイード川まで広がり（ナショナル）、〈士族間の〉不和、宗教、政治などの古く血なまぐさい障壁の上に覆いかぶさった。

しかしながら、それはハイランドとロウランドの間の壁を越えることはなかった。発起人（プロモーター）たちはそれを*スコットランド会社*と呼んだが、それは実際にはロウランドに特有のことであった。ハイランド人は、人口の多数ではなかったとしても、大部分がほとんどないしはまったく好意的な支持を示さなかった。あのイルクのマックファーレン、アーガイルのキャンブルのような少数の例外はあっても、士族の長たちは、この商売人の新事業には尊大にも距離を置いていた。出資者名簿には、キャメロン、マクドナルド、マクレオドないしはフレイザーの紳士方も、アピン・ステュアート、チゾム、マックリーン、グラントも、見いだすことがで

きない。彼らのほとんどは、最近までウィリアムとの戦闘状態であり、亡命状態でないところでも反乱を余儀なくされ、ジャコバイトに同調的で、ロウランドには疑心暗鬼であり、その政府のことを恨んでいた。最近ウィリアムのために戦った者は別として、その会社がこの族長たちから援助が期待できるなどということは定かではなかった。それでも、多数の普通のハイランド人たちは、将来の植民地に厳しい苦難があるという考えを共有していた。

使い古しのあざけりを使った、不承不承のほめ言葉で、ウォーター・ヘリスの曰く、「金持ちも、貧乏人も、盲人も、足の悪い人も、この王国の各方面から、この会社の社屋で名簿を垣間見て、パタースンという人物をひと目でも見ようと、群れをなしてやって来た」と。

〈p.58〉その帳簿に名前を記帳した一番乗りは、3 名のご婦人方だった。パーディ夫人の小さなコーヒーハウスは、ハイストリートには馬車や馬、大声で叫ぶ群衆で騒々しい状態だったにもかかわらず、ドアが開け放たれるとすぐに、上流界のお歴々、社交界のブロードクロス、商人たちや兵士たち、法令や薬物でいっぱいになった。そうこうするうちにマッケンジーの職員は、最近誂えた羽ペンを手にして高い腰掛けに陣取り、最初の文言を弱々しく、認(したた)めた。*われわれ，ハミルトン・チャストレノルトのアン・ダッチは，3000 ポンドスターリング*を出資する。…彼が彼女にペンを渡し、彼女が署名を行うのに続き、自分に 2000 ポンド、息子ハディントン伯爵に 1000 ポンドを出資したラシス伯爵夫人が、自分には 1000 ポンド、その若き息子ホウプトンのレアドには 2000 ポンド出資のマーガレット・ホウプトンが続いた。続いてロバート・チーズリ卿は 2000 ポンド、その次に別の人たちが、カフスと剣の束を翻して、階層や順位にはお構いなく、出資名簿に急いで押し寄せた。バルフォアとブラックウッド、サルトーンのフレッチャー、オーミストンのコクバン、ジェルヴィスウッドのベイリー、ベルヘイヴンとベジル・ハミルトン卿。

さらに、500ポンドと書き記したエディンバラの商人ジェイムズ・バイリス氏、その人はその会社の植民地で昇進する希望を持ってはいたが、悲惨な形で実現することになった。初日の終わりまでに、ロウリー・マッケンジの帳簿には69名の名前が見られ、出資総額は50万400ポンドとなった。

春から夏までと、グラーズゴウとエディンバラで出資は継続した。紳士や淑女たちから、兵隊たち、船長や商人たち、醸造業者たち、麦芽製造人や仕立屋たち、法律家たち、外科医たち、内科医たちや薬剤師たち、聖職者や印刷屋たち、製本業者たち、ガラス工たち、なめし工たち、ワイン商人たち、大工たち、鍛冶職人たち、ベルト修理工や織工たち、農夫から法学寮（コレッジ・オブ・ジャスティス）の判事たち、玉璽（Writers of the Signets）の書記たち、金細工師たち、学校の先生や寡婦たち、郵便局長たち、毛皮商人や馬具製作者たち、鉄砲鍛冶、刀鍛冶から剣術使いたちにいたるまで。個人はもちろん、団体もまた、弁護士団体（the Faculty of Justice）、エディンバラの靴職人組合員（Incorporated Cordiners of Edinburgh）たち、グラーズゴウの桶職人たちまで。石工たち、仕立屋たち、馬具製造人や船大工たち、一人では経済力が足りないが、団体ならと、合同出資で100ポンドどころか、300ポンドなら可能だと言うようなのまで。エディンバラという「名誉ある街」、セイント・アンドルーズ、グラーズゴウ、ペイズリー、セルカーク、インヴァネス（ハイランドでは例外）、その他多くが、それぞれの都市名で出資したから、貧乏人や土地なし、泥棒から、売春婦や乞食に至るまで、かの高貴な事業の一角を占めようと考えることができることになった。

〈p.59〉国王による戦争の終結が迫り、給料の半額どころか全額の支払いが不確かなのを感じ取って、士官たちは戦利賞金や、戦利品からの報酬、あるいはもっと将来性のある親族からの借り入れを期待した。フランダース出身の実直なジョン・ブラッカダー陸軍大尉は、兵隊歴について文字通り自信たっぷりで、常日頃から主のご加護に疑いを挟むこと

はなかったが、流れ弾や運悪い刀傷に対しての保険契約を怠らなかった。彼は、エディンバラの商人だった弟のアダムに、彼の名義で 100 ポンドを依頼した書簡を出していた。11 名の将校たち、つまり 2 名の少佐、6 名の陸軍大尉、2 名の中尉、と 1 名の歩兵少尉は、そろってフォート・ウィリアムのジョン・ヒルズ連隊所属だったが、合わせて 1900 ポンドを出資した。彼ら以外にはそれほど多額の出資はなかったので、彼らの場合は魅力的だった。彼らは 4 年前のグレンコウの虐殺の折に、アーガイル伯の連隊に関係していたので、その多くは、この会社の法律が議会の通過を見た時には、調査のためエディンバラにいたのであった。彼らはそれに対する熱狂の虜となるか、こうすれば彼らの名誉のいくばくかは取り戻せるとの希望を持ったかもしれない。もっとありそうなのは、彼らの中の一人、イーケットのジェイムズ・カニンガムが、残りの人たちを説得したことであった。というのも、バイレスのように彼は植民地での仕事を熱望しており、そのような援助を手に入れることによって、自分の昇進をも手に入れると主張できたかも知れない。

1689 年のウィリアムの戦役で数多の武器をつぎ込んだので、キャンブル一族は、確保の上準備した財産をいまこそと差し出した。その偉大なる族長であった、第 10 代アーガイル伯アーチボルド、マックカイリーンのモーは、1500 ポンドを出資、彼の兄弟ジェイムズが 700 ポンド、彼らにつき従う者には 22 人の紳士と商人たちがおり、すべてディアメイド一族の名前と忠誠を所持していたのだった。アーガイル州裁判官(the Sherif of Argyll)アードキングラスのキャンブルがおり、法学寮判事(Senetors of the College of Justice)アーバーウチルのキャンブルもいた。地主のキャンブルのみならず、マンゴー、マシュー、ダニエル、アーチボルドだけでなく、スーター、モンジー、ボグホルト、カルダー、チェスノックとキンポイントのタクスマン(借地人)たちもおり、彼らはグラズゴウとエディンバラで商舘を持っていた。10 年前にジャコバイト一党が彼らの土地財産に対して働いた恐るべき襲撃からほとんど回

復していなかったものも若干いたが、彼ら中には合わせて9400ポンドを出資したものもあった。

〈P.60〉グラーズゴウの出資帳は3月5日に開かれ、4月22日に締め切られた。エディンバラでも8月1日に閉じられ、合わせて40万ポンドが出資された。双方の帳簿には1400の申し込みがあったが、多くは都会（タウンズ）や町（バラズ）のような、団体や組織であって、関係した人数は、何万にも達すると見られ、こうなると、すべての人が、この会社を、アフリカ会社、インド会社と誇らしげに語った。6月には出資者に対しては最初25パーセントの請求金が設定されたが、レスポンスはちょうど10万ポンド・スターリング未満で債務不履行者は全くなかった。

パタースンは、春いっぱい、さらに夏のはじめまで会社のための定款を提案する書類を次から次へと作成するのに多忙で、彼はそれを発起人（プロモータ）に提示し、それは念入りに朗読されては廃棄された。会社は彼が不在でも体をなして行った。今や、重要人物からなる総会（Council-General）が存在し、多数の人々から指名を受けた理事会も存在したが、理事たちの熱意ある助力と賢明な交渉とによって、総資産（エステイツ）の隅々にいたるまで堂々とした状態で、その法令は通過させられた。理事の総数は、報酬が充分与えられるものすべてを調整し、多様に活動する委員会に十分な人員を供給するために、50名に定められた。パタースンに保証を与え、特典で報いる潮時であったが、ようやく5月の理事会になって、彼はほとんど不承不承で理事に指名されることになった。すでにロンドンで署名済みであった3000ポンドを出資するとのジョン・スミスの約束にもとづき、彼も理事となった。とは言っても、その約束はすでにパタースンが行っていたもので、スミスがその後その会社の代理人として当時ロンドンに派遣されたことが、パタースンの推薦によっていたのを理事会は、後になって知ることとなったのである。

事務員たち、窓口係たち、出納係や会計士たち、門番や伝令たちなど

の雇い入れがあったが、やはり彼ら全員を収容する格好の家屋は全くなかった。ローデック・マッケンジの事務所といえば、ハイストリートから、理事会や総会が適宜開催されるレイの国会議事堂へ、あるいは改良委員会が非公式に召集されるマックルーグのコーヒーハウスへと、彼の事務員が彼の後ろにくっ付いて持ち込んだ書類やら羽ペン、インク壺などの入った旅行カバンのようなものであった。この委員会の５名の構成員には、バルフォア、ブラックウッド、それに真剣で、献身的なパースシャの地主（レアド）、グレンイーグルのジョン・ホールデンが含まれていたが、彼〈ホールデン〉は、プロテスタント信仰の救済とスコットランド繁栄の保証とみなしていた、あの革命（レヴォルーション）以来その土地にとどまっていた。〈p.61〉店舗、装備、商品に対する信頼や、船舶が購入され、建設され係留される場所を見つけることはこの面々の肩にかかっていた。パタースンは、彼らの仕事から発する明るい炎の周りにいる蛾のように、ウロウロしていたので、人々は彼を温厚で寛容な性格の持ち主と考えて、一旦はグラーズゴウに派遣し、はるばるダンバートンに至るクライド河畔の調査をさせ、会社の船舶が係留し、積載するのに適切な深さの流れを確認させた。それは、彼がスコットランドに戻って以来、彼に与えられた最初の実質的な仕事であったが、もしも彼が報告を提出したとしても３年の間はなんら関心が払われなかったであろう。

委員会は、国王の測量長官（master of Ordnance）、あるいはの歳出委員会（commissioners of supply）の羨望を招いたかも知れない約款（コントラクト）を作成した。彼らは１週間に一度、ロウランド中からやってきた商人たちが彼らの仕事の実例とその経費の率直な見積りを持ち寄った国会の鏡（パタンチェインバー）の間に、参集した。委員会は、火縄銃と弾薬帯、弾薬、ピストルと大刀を発注した。彼らは、細挽きノコギリ、横引きノコ、マチェーテ〈ナイフ〉、ビルナイフ、シャベル、防御斧（fencing-axes）と駐鋤（ちゅうじょ）、鋲釘、窓釘と画鋲、さらにまた鉢（bowls）、大皿、スプーンとアイロン（smoothing-irons）、ロウソク立て、ランタンとタバコ桶（hogsheads of tobacco）にまで至る契約書に署名した。彼らは、一度に

長靴下（tartan hose）と靴下、600足の靴を注文した。彼らはリースに倉庫を買い入れたが、そこでは取引人や商人たちが、注文された諸商品を、毎週火曜日と木曜日に、8時から6時の間に、配達するよう伝えられていた。彼らは、一度に69ダースの使い古した靴下を仕入れ、イソベル・ビッカートンと言う、ある職人の女房のところに繕物（つくろいもの）として持ち込み、彼女はそれを染色のため染物屋に持ち込んだ。彼らはまた、お買い得価格で聖書を探し、印刷屋アンドルー・アンダースンのものだったものを、アグネス・キャンブルの物置で発見した。彼らはジェレミー・ロバースンがそれを望むだけたくさんのカツラにできるのを発見して（そして彼らはとてつもない数を望んだが）、彼らが買い付けた山のように沢山のサージを、「4分の1を黒で、4分の1を青で、4分の1を数種類の赤で、4分の1をいく種類かの布地の色で」染め上げることに決めた。

7月までに会社は、その肩書きに相応しい荘厳さと、その意図にかなう威風を備えた事務所を手に入れた。それはもはや、パーディ夫人の窓際の椅子とかローデック・マッケンジのスーツケースでも、レイの館にある重苦しい枢密院の会議室やリースの保管倉庫にある人目につかない場所でもなく、〈p.62〉ツローン教会の向かいにあるミルン・スクウェアの高く聳えた灰色の建物であった。パタースンがそれを見つけた。彼が理事会に指名を受けた時、適切な物件の購入を整えるよう求められたのである。彼はそれを彼の能力を発揮するにはとるに足りないとは思ったが、他の二人の別の理事たちの助けを借りて、それに精力的に取り組んだ。ミルン・スクウェアは、小さな舗装した袋小路を囲む大きな三面からなる建物で、リースに面したその裏窓の北からは、精肉市場や細い入江の一部である緑の低湿地を臨むものであった。それは、ロバート・ミルンによって6年前に建てられたものだったが、その先祖は6世代にわたり、国王の石工（マスター・メイソン）であった。その建物は、威厳に満ち、ゴツゴツして、黒く、内側の窓にはほとんど太陽が入らなかったが、静かで、狭い入り

口は門番が防備するのに容易であった。会社は最初は一方の側だけを使用して、その所有者であった弁護士ジョン・エイディングトンに 395 ポンド 17 シリング 9 1/2 ペンスを払い、後にもう一方の側をブルームヒルのマッケンジから 455 ポンド 11 シリングで買い取った。ローデック・マッケンジは妻と家族を上階に移らせ、残りには、彼の職員たち、出納係たち、金庫番たち、会計士たちを配置した。

ここで一定数の理事たちがほとんど毎日参集して、会社の全般的な行務を決め、改良（Committte for Improvement）、外国貿易、財務（トレジャリ）の委員会からの報告を受けた。また、ここで総会（Council-General）と理事会（Court）は、おそらく何ら理解することなく、パタースンの計画と*資金計画の提案*に示された勧告に従った。彼らは債権基金（Fund of Credit）を設定し、それは速やかに、素晴らしいデザインの施された銀行券と、グラーズゴウ、ダンディー、アバディーン、ダムフリースで代理人たちへと発展した。それは当初から法にかなってはいなかった。今では 12 ヶ月を経たとはいえ、未熟なスコットランド銀行は、21 年間の独占権を与えられていたとは言え、もしその理事たちが、この会社によるこの海賊的な侵犯に不満を持てば、この基金（Fund）の消失を静観する十分な判断力を持った。間もなくそれは起こった。それが植民地の惨状という苦境に陥った場合には、その会社は債権ファンドにのための資金は持たない運命（定め）にあった。

アフリカやインド諸島において現在どんな貿易商品が求められているのかを知るため、ジェイムズ・スミスがイングランドに派遣された（それは、彼がロンドンの出資者たちのいく人かを説得して出資に際して最初の支払を説得できると言う信じられないほどの希望を伴うものであったが）が、理事会は、アリグザンダ・スティーブンスンとジェイムズ・ギブスンという他の二人の理事たちに対し、〈p.63〉「あなたが、造りがしっかりして、申し分がなく、かつ東インド方面への航海に耐えられる、各々およそ 600 トンの、5 から 6 隻の船舶を購入または建設する最良か

つ最速の方法と理解する海域から取り戻せる」許可を与えた。彼らはオランダとハムブルグに向けて出発した。

今や残ったところのものは、何処で、会社が植民地を建設するか、何時船舶を購入し、積荷を載せ、指導者たちを選別して、開拓者たちを入れるのかだけあった。

かくしてウィリアム・パタースンがいま一度思い起こされることになった。7月の終わりのある日、彼と友人のダニエル・ロッジが、外国貿易委員に指名され、委員会において、パタースンが、「アフリカないしインド諸島あるいはその双方の島嶼、河川、地域において」、植民地、あるいは開拓施設について所持している、計画または提案を提示するべく召喚を受けた。ヨーロッパだけでなく、彼の年齢をも越えて膨らむ可能性を持つパタースンの想像力は、個人的な域を越えており、彼自らを脚色したものではなかった。彼がこの招聘を受け入れた時、彼はまさしく強い満足そのものを感じたと思われる。だが、ひとつの夢が驚くべき現実性を帯びて、10年に及ぶ苦しみと失望、嘲笑と疎外感が今や報われて、気高い計画という未来が彼の働き次第となった。7月23日に彼は、最近10年に及ぶ膨大な書類の集積、原稿、自分自身ないしは他人の仕事を通じた書物や雑誌類、地図や水深調査、星座や天体観測器による知識、船長や海賊たちとの会話記録、野蛮なインド人や珍しい植物の絵など、スペイン語やフランス語からの翻訳類、僧侶や海賊たちの発見したことなどを携えて、ミルン・スクェアに姿を見せた。これらはすべて、宇宙の鍵をまわし、海への扉を開くのに必要なものであった。

パタースンがパナマに建設されるはずの大*集散地*（entrepot）について語った時、その書類群は委員会のテーブルの上にあり、彼がその地峡に上陸したことがなく、3000マイルも離れた神の島からもそれが視野に入らないと言う事実も、重要だったとは思えない。彼が持ち込んだ情報は圧倒的であった。折にふれて、説明のため、ダニエル・ロッジは、フランシス・

スコット卿に日誌を、ウィリアム・ワードロップ氏に地図を、アーチボルド・ミュア卿には書簡を渡した。彼らは、風変りにな人たちで、おかしなことに子どもの頃から変わった人たちで、興奮していたとは思われない。ここで彼らは、スコットランド紳士が袖口にレースの飾りを何気なく纏うように、鼻孔に金を身に付けたインドの王様たちはのことを知った可能性もあった。〈p.64〉ここには、彼らの想像を上まわる、渓谷、河川、さらに港湾が描かれていた。彼らは、海賊船の船室でランタンの光を頼りに綴られ、そのガラスの周りを珍しく美しい蛾が舞い踊る日誌のページをめくったかも知れない。彼らは、哀れを誘うヤシの木の木陰の下で描かれた海図に熱中し、こわばった羊皮紙からカリブ海の青、または砂の水晶のような輝きへと目を移して船旅をする絵かきを想像したかも知れない。だが、彼らの計算高いものの考え方に確信を持たせたのは、パタースンの提案という単純な理由であった。つまり、大西洋と太平洋をまたぐ商業の植民地、世界の天然の中軸（ハブ）、二つの海にまたがる最短の架橋の中心である。

会合が打ち切られ、委員会がパタースンに、もしも会社がこうした書類を留め置くとして、彼は自発的かつ無条件の寛大さで同意するかを尋ねた。議長を務めるフランシス卿の求めに対し、彼は、しっかりと綴じられ、封印された一つの大きな束にそれをまとめた。それは、それは別の 4 人の理事たちによってさらに封印され、理事会（Court）の指示なしには開封してはならぬと仰せつかったローリー・マッケンジに手渡された。これはすべて然るべく指示を受け、議事録に挿入され、その次に、

> 以下のように決議された：上記パタースン氏が上記の計画を促進するに際しての苦心、経費、費用、さらに彼が今後この計画を推進する際に存分に苦心や時間を可能な限り使うことを可能にし、奨励する諸手段を、この会社が考慮しなければならないと言うのが、本委

員会の公式見解である。

委員会は、これを正式に考慮して、この決定によって、パタースンにいかなるものが与えられようと、会社の利益に再度付加されるのであるから、その権限は寛大すぎることはない。彼は、会社の株式（ストック）から7500ポンドを授与された。

ここにいう、この計画こそがダリエンの植民地のことであった。議事録や、記録という形ではそれを示唆するものは何ら認められないにもかかわらず、そこに植民を行うという決定が、その週に疑いもなくなされたのであった。そうした秘密裏のうちに、あたかもメロドラマであるかのように虚しいことになる運命にあった植民地建設に水を差すには遅すぎるとなる時点まで、イングランド議会が警鐘を鳴らすことはないとの希望を、会社は持っていたのであった。<p.65> かくして、外国貿易委員会（Committee for Foreign Trade）は、アフリカ、東西インド諸島のある島、ある川、ある場所に「全速力で立ち向かう」植民地を提案するという、不確実かつ、あえて誤解を生むような決議を通過させた。ダリエンの植民地についてパタースンが熱を込めて主張したことが、理事会に強い影響を与えたのだが、最終的に得心させたと思われるのは、彼が会社に引き渡した、書類の中の分厚い原稿であった。彼はそれをその友人ウィリアム・ダンピアから借り受けたが、おそらくそれを手放す権限があるとはまったく考えてなかった。と言うのも、その著者は、自分にその所有権があるとも考えてなかったのであった。それは、最近では*バチェラーの喜び*とされるもので、最近カリブ海（メイン）からイングランドに戻った、医者の心得もあった若い海賊の書いた日誌の複写だったからである。

彼の名前はライオネル・ウェイファと言ったが、ヨーロッパには誰であれ、ダンピアでさえも、ダリエンについて大した知識は持ち合わせた者はいなかったのである。

「谷は河川、小川、そして絶えることのない泉を潤す」
エディンバラ、1696 年 7 月

「私の知る最善の知識に従い、真実であること以外に何も語らずに、以下のことにとりわけ注意してきた」、「だが、腑に落ちない事実もいくつかある」と、理事たちは読み上げた。

実際、ライオネル・ウェイファは正直で、慎重な男であった。ヘリスはもちろん、彼の悪口を言う者はなかった。そして、ウィリアム・ダンピアは、カリブ海での自らの航海について記した時、「私よりも長きに渡って滞在したウェイファ氏の方が、私の知る誰よりも当地について語ることができる」からと、ダリエンについては、言葉少なめであった。ウェイファの書いたものの写しが、この地峡に赴いた数多くのスコットランド人の行李の中にその後持ち込まれ、彼らが見つけたり、見物したことを母国に書き送った時、ウェイファの言に異を唱えることは全然なかったし、そのセリフをあたかも自分のもののように利用したのであった。

彼と、彼の経歴と出自について知られることのすべては、彼が自分のことについて話そうとしたことに限られている。彼の述べたことは、ゲール語にいささか知識があり、子どもの頃スコットランドのハイランドに住んでいたことであった。彼はアイァランドのことにも通じており、その父親はアルスターに駐屯したクロムウェルの軍人の一員で、後にはフィッチ大佐の連隊と共にロッホアーバに派遣されたかも知れない。元をたどればウィーヴァーとかデラウェアとか言う名前については、ユグノーの出だとの言い伝えも〈p.66〉あったが、これについてその若者は、おそらくは何ら重要でないとの確信によって何も言わなかった。1677 年、その時彼は 16 か 17 であり、船舶勤務の外科医助手、ないしは船酔いに対して薄い粥を出す船医の助手として、海に出た。彼はスパイス諸島で商いをする商人に従い、自ら外科医を行えるのに十分なほど主人の

仕事に習得していた。その後ジャマイカに赴いて、スペイン人の村の北西にあった砂糖農園で働く兄弟を訪ねた。ここで彼は、ことによっては柳刃や瀉血カップの方がもう一方の短剣よりも重宝だとする、海賊団に加わった。彼はこの危険で予知できない生活を選んだことについて何の理由も述べてないが、彼が若かったこと、そこに理由がある。

彼は、クック、リンチ、コクスン、さらにバーソロミュー・シャープ、アリストンとトマスマゴットたちの一団に加わり、金を求め、スペイン人の喉笛を切り取るためにこの地峡を荒々しく急襲するのに参加した。その後、他の者たちがピストルの弾や刀傷、熱病や郷愁、あるいは老齢や衝動的な若さが原因で死亡したが、彼は生きながらえた。彼の仲間たちは、闘い商売を行い、飲み歌い、急場の働きと当座の稼ぎで満足していたが、彼もこうしたことのすべてに携わったとはいえ、同時に彼はじっくり観察もして、記憶にとどめた。細部にわたる彼の眼力は、信じられないほどにスキがなく、洞察の結果をよく彼が記録した飾らぬ文体は、もっとよい教育を付けた人間にも付きまとうやり方を免れた、簡潔で、魂を呼び起こすものであった。彼は、読者たちに、申し分のない日誌のような何かを期待しないように控えめに求めた。「私の第一の意図は、ダリエン地峡について私に可能な何らかの説明を与えることでしたが、……私が海外にあった時私はほんの若造で、日記もつけておりませんでした、ですから些細な欠点とか欠陥については、免除されるでしょう。ですが、私は自分自身の記憶に全面的に頼ってはいないのですが、私が書き留めたいくばくかは、私がイングランドに戻るはるか以前のことです。」

彼が記したこの土地は、この地峡が南アメリカの付け根部分に向かって湾曲しているパナマのカリブ海側、北緯8度から10度の間に存在する。ここには、ダリエン海岸にある無数の湾と入江と、白砂からなる静かな海岸、緑の宝石のようなちっぽけな島々があり、そこでは、ドレイクの

時代以来、昔から海賊たちが船に給水し、手入れを行い、西にはポルトベロ、東にはカルタヘナへと派手な急襲を計画し、時には実際に行っていた。〈p.67〉3 年にわたりウェイファはダムピアの水夫仲間であり、あの素晴らしい水路測量士に従った 300 名の一員であったが、レアル・デ・サンタ・マリアのスペイン人に対して、2 つの山脈を超え、1681 年 5 月地峡を越え、失敗に終わった行軍では、三流の海賊にとどまった。ある晩囲いのない焚き火の銀皿の上で火薬を乾燥させている時、ウェイファの足は突発的な発火によってひどい火傷をして、インデアンたちの手あてを受け、後方に残された。彼はその者たちと共に 2 ヶ月ながらえ、彼らに感謝しまた彼らにも敬愛されたが、一人の黒人奴隷が彼の背嚢を持ち去った時に彼の奴隷と膏薬を失ったことだけを後悔した（「だが、私は器具類を一箱と、油布で包んだいくばくかの医薬品をしまっておいたのだから。」）が。この牧歌的な時間が彼に、観察、反省そして発見の機会を与え、その結果おそらくは、後に彼が書物に変えることになった覚書きを記録することになった。彼にはダムピアのように絵を描く技術はなかったが、彼の筆はそれを上回る生き生きとした描写ができたのであった。彼をとりまくものはどれを取っても、濃い深緑のジャングル、説明できないほどの静寂とウットリするようなざわめき、いまだかって人が名前を付けたことのない動物たちであり、物悲しくも彼に故郷を思い起こさせるものでもあった。霞に覆われた山並みが連なり、「渓谷が川を、小川を、そして絶えることのない泉を潤し」、ヤシの葉っぱがボンヤリとカリブ海をもてあそんでいる、海陸地との突然の、予期しない出会いがあった。

その書類に目を通すにつれ、会社の理事たちは、エディンバラのどんよりした崖、街路の悪臭、丸石の石畳の騒音から、楽園とまがうことのないもの、スコットランドのエネルギーとスコットランドの勤勉による略奪を待ち受ける豊かで従順な土地へと誘われ、われを忘れたのであっ

た。ウェイファの本によって彼らに吹き込まれた希望があまりに大きなものだったので誰一人としてそこに潜む危険の兆候を見たものはなかった。確かにダリエンは、海賊どもが彼らの船を上陸させ、スペイン人を急襲し、再び海に漕ぎ出す土地ではあったが、北アメリカのように入植され、定住が可能で、植民地となりうるとこの若い外科医が示唆したところはどこにもなかった。世論からの影響を受けるという彼のセンスの良さに従って、イングランドの植民を提案したのは、1704年に出版された彼の書物の第2版への序文の中でしかなかった。その時ですら、スペイン・アメリカ帝国を結びつける紐（コード）を断ち切る、軍事的戦略的占領を示唆していたのであった。

続く